

(6) ハチ目

選定・評価方法の概要

アリ科を除くハチ目では、本土部レッドリスト 2010 の掲載種 15 種を再評価するとともに、前回検討対象種で掲載種とならなかった 2 種と、あらたに 4 種を加えた 11 科 21 種を検討対象種として選定した。セイドウマルセイボウは記録が少ないこと、ウスリーマルハナバチは最近の記録がないこと、キゴシジガバチは従来普通種であったが近年各地で減少していることから今回検討対象種とした。ハチ目（アリ科を除く。）では東京都全体のまとまった調査報告はないため、初歩的段階として隣接県での分布及び生息状況等を参考に、定性的要件により評価を行った。文献及び標本調査では、なるべく最近の記録を取り上げるようにしたが、種類や地域区分によっては 1920 年代の文献記録や標本以外見いだせなかった場合がある。なお、ハチ目は上位分類も含めて、研究途上にある。ギングチバチ科を含めたミツバチ上科内の科等の扱いは今後変更される可能性がある。

選定・評価結果の概要

評価の結果、20 種が本レッドリストの掲載種に選定された。ハチ目（アリ科を除く）は、文献・標本等が限定されていることもあり、本土部全体におけるランクの内訳は、絶滅（EX）が 4 種、準絶滅危惧（NT）が 7 種、情報不足（DD）が 9 種となった。

区部では 1930 年代まではフルカワフトハキリバチの記録があった。1950 年代まではムツボシクモバチ、キスジクモバチ、ヤマトアシナガバチの記録があった。河川周辺や湾岸部では近年でもキオビクモバチ、キボシトックリバチ、アカオビケラトリバチの生息が確認されている。多摩部では区部で記録が見い出されなかったバラヒラタハナバチ、クチナガハナバチ、ヒダクチナガハナバチ、セイドウマルセイボウ、ヤスマツヒメハナバチ、ウスルリモンハナバチ、ウスリーマルハナバチの記録があった。ただし、これらの種類が区部に生息していた可能性もある。多摩部では 1950 年代までムツボシクモバチ、ヤマトアシナガバチ、フジジガバチの記録があった。クロマルハナバチは、野生個体でないハウス内花粉媒介用に放飼され逸出したと考えられる個体が区部、多摩部ともに野外で確認されているため今回ランク外とした。

南多摩及び西多摩には調査不十分であるが、山地性の種類が生息しており、ニホンジカ等による植生の消失は、幼虫が草食性のハナバチ類や花の蜜と花粉を利用しているハナバチ類の生息に大きな影響を及ぼしていると考えられる。比較できる基礎資料が少ないため明らかでないが、多摩部の丘陵部における環境の改変により、多くの種類が激減または絶滅していると推定される。

なお、近年著しく増加または分布拡大している種としてチャイロスズメバチ、キンモウアナバチ、アメリカジガバチ（外来種）、トモンハナバチが挙げられ、今後の動向には十分注意する必要がある。原因は種ごとに異なると推定されるが気候変動の影響も一因と考えられる。アメリカジガバチはキゴシジガバチの生息に影響を与えている可能性がある。

（高橋 秀男）



ウスリーマルハナバチ